

毎日である。

## 戦争で失われた青春

神奈川県 須藤 卓雄

一 生い立ちから渡満まで

私は、大正十四（一九二五）年十月に山形県の日本海側にある鶴岡市で、須藤家の次男として生まれ、両親と五歳年上の兄との四大家族で、平凡な家庭の普通の子供として育てられました。

昭和十三（一九三八）年の春、地元の尋常小学校を卒業して、県立鶴岡中学校に入学しましたが、同時に兄は鶴岡中学校を卒業し、ストレートに第一高等学校に合格していました。そのころが我が家にとっては、至福の時代でした。しかし、それも束の間のことです、間もなく母が乳がんになり、手術をしましたが、とき既に手遅れで、幾月も経たないうちにがんが体内のあちこちに転移し

ていて、何度も入退院を繰り返していました。東京のがん研にも行って診てもらうなど、八方手を尽くしたのですが、薬石効なく、家族の願いも聞き届けられずに、昭和十五年一月にとうとう他界してしまいました。

それに伴って父は満州に行くことになり、兄は東京の一高の寮に、一人で鶴岡に残る私は市内で下宿生活と、三人が三様でそれぞればらばらになって、一家離散することになってしまいました。それ以後、この三人が一堂に会するということは、とうとう訪れることがなかったのです。

そのようなことで、鶴岡で下宿生活をしながら中学生生活を送っていた私ですが、昭和十七年八月、五年生の夏に、当時の過酷な勤労奉仕と、気ままな下宿生活との相乗作用によって、肋膜炎と肺浸潤を併発してしまい、東京の清瀬町にあった療養所に入り、療養生活をするようになってしまいました。

当初の診断では、一年の療養によって退院し、

その後復学もできるということでしたが、一年経っても学校生活に耐えられるまでに体が回復していなかったため、やむを得ず鶴岡中学校五年を退学して、そのまま療養生活を続けていました。

体の方はだんだんと回復に向かい、それほど不自由なく動き回ることができるように戻ったのですが、東京の食糧事情は日を追うごとに悪化してくるし、そのほかのあらゆる生活用品も品薄となり、ついには配給制になってしまい、日常生活が大変に窮屈になってきました。そのために、療養所の食事などにも影響が如実に現れてきて、誠にお粗末なものになってきました。

そんなところに父から、栄養の面からみても、気候の点からみても、満州の方がよほど良いから、こっちに來て療養する方が良策ではないかという話が出て、これ幸いとばかりに、昭和十九年四月に、父のいる満州に渡りました。そんな理由だったので、多くの方々と言われるような「王道樂土の建設」とか、「五族協和の実現のため」とかい

ような、理想に燃えての渡満ではなかったのです。

私が満州に渡るころには、もう汽車、船などの切符を手に入れることは大変な仕事になっていて、毎日朝早くから並んでもその日には買えず、数日かかってやっと所望の切符が求められるという状況になっていました。

やっと切符が手に入り、まず東京から新潟まで行きました。船は新潟港から乗船しました。乗船してから船内では、特高警察から厳重な荷物の検査と渡満の理由を、ごう慢な態度で、しかも執拗に尋問されましたが、とにもかくにもどうにか朝鮮の羅新港に着き、大陸に第一歩を記しました。羅新からは新京（長春）行きの列車に乗りましたが、列車が発車して間もなく、今度は朝鮮人の特高警察が乗り込んで来て、また荷物の検査を始めました。日本人である私の前は、何事もないかのような表情をして素通りして行き、朝鮮人や中国人の前に来ると、男女を問わずに徹底的な検査を

していました。相手の態度がちよつとでも悪いと、容赦も仮借もなく、ビンタをくわしていました。女性に対しては、穿いているズボンの中に入れて手を検査をしていましたが、私はそれを目の当たりに見て、無然としたものです。

車内でのそんな出来事を見ているうちに、新京に到着し、ここからハルビン行きの特急行列車「アジア号」に乗り換えました。アジア号のことは、小学生のころから知っていたので、大変に興味を持っていましたが、三等車はものすごく汚くて、しかも混雑していて座れる席もなく、立ったままでした。すると、多少日本語のできる中国人が、座っている人を立たせて私を座らせてくれましたが、何とも後味の悪い思いをしながら座っていました。こんなところにも、満州に進出している日本人の優位性があつたことを感じさせられたひとこまでした。

渡満当初からいろいろな体験をしながら、やっとハルビン駅に着きましたが、迎えに来るはずの

父の姿が見当たらず、右も左も分からぬ所で困惑していると、旅館のポーターが声を掛けてきたので、これ幸いとその晩はその旅館に泊まることにしました。あまりきれいではない旅館でしたが、インチキな宿ではなかったのは幸いでした。部屋に落ち着いてから冷静になつて考えているうちに、以前に父から、仕事でハルビン市内に出て来たときに泊まる、言わば常宿のことについて聞いたことがあつたことを思い出しました。電話帳をめくつて、それらしき宿を探し当ててそこに電話をすると、案の定父は仕事でハルビンに来ていて、すぐに飛んで来てくれました。これでハルビンではひと安心ということになりました。

ハルビンに着いてまず驚いたことは、夜が更けても街灯が明々としていて、店や住宅でも明かりが灯っていて、市街全体が明るいことでした。そのころ日本本土は、灯火管制のもとにあつて、夜になつても街灯はつかず、家々の電灯も黒い幕を掛けて薄暗くしていました。夜、外を歩く

ことは、暗闇の中を歩くようなもので、ハルビン市街のこの明るさにはびつくりしたものです。

さらに、翌日父に連れられてハルビン市街を見物したのですが、昼食にロシア料理のレストランに入り、豊富なメニューを見て再び驚きました。

東京では一部の特権階級の人ならいざ知らず、一般市民では到底口にすることはできないような料理でした。そのほかにも、すべての食料品の豊富なことにはびつくりし、別天地に来たように感じました。異国の珍しい光景を目にして、翌日父の住んでいる街に連れて行かれました。

## 二 終戦までのこと

父は当時、満州帝国協和会の職員で、協和会濱江省蘭西県本部事務長をしていて、蘭西街の中心地にあった事務所の裏手の、瀟洒な洋風の公館に住んでいました。周囲には日本人は一人も住んでいない所でした。

蘭西ランセイという街は、鉄道も電気も水道もない田舎街で、私は生まれて初めてのランプ生活となりま

したが、その反面、珍しさも手伝って、なかなか乙な生活でした。

その年、徴兵制度が変わり、徴兵検査が数え年二十歳に繰り上げられ、病身の私も検査を受けることになりました。蘭西に来てすぐのことだったので、ハルビンで検査を受けましたが、当然のことながら丙種合格でした。以前は、甲種合格者のみ現役兵として徴兵されましたが、戦局の悪化から大量動員となり、甲種・乙種が現役徴兵となり、丙種でも召集兵としていつ召集されるかわからないが、いずれは兵隊に行かざるを得ないようになっています。

徴兵検査後すぐに、父の力でハルビンの協和会濱江省本部の露人部で行っている、職員のためのロシア語養成機関に特別に入れてもらい、朝から晩までロシア語の勉強に明け暮れる生活を始めました。そんな生活が数カ月も続きましたが、やはり健康の回復がはかばかしくなく、とうとう蘭西の家に戻り、再び療養生活になりました。

最初に悪くなったときには右の肩が痛み、リューマチではないかと言われましたが、栄養摂取に努力した結果か、そのうちに痛みもだんだん薄らいできて、体全体の状態も大分回復して、軽度の運動もできるまでになりました。最初にリューマチではないかと言われたのが大変な誤診で、後に大変な病気に発展しました。

時局が緊迫している時期ですので、毎日家であらぶらしているよりも、そして体を慣らすためにも、ということ、蘭西県公署（日本で言えば県庁）に勤めることになりました。配置された職場は楽な仕事でしたが、そのうちに日本人の知人もでき、中国語の勉強にも役立ち、悪くない毎日でした。

話が前後しますが、蘭西での我が家は、父が後妻を取り、異母妹が一人いて、四人の家族構成となっていて、それに通いの中国人の乳母、中国人のボーイで総勢六人でした。一高に行った兄は、大学を卒業して北京に就職していました。妹は生

まれつき体が弱く、中国人の乳母が付き切りで世話をしているという状態でした。

戦況も日を追って劣勢となり、敗色が濃くなる一方でした。蘭西にいる青年たちも次々と召集されていき、協和会にいた私と同年輩の良き友人であった、宮城県出身の青年にも召集令状がきました。彼はそのころ体の状態があまり良くなく、微熱が続いていて、私の診るところでは、軽い結核にかかっているのではないかと思われる症状でした。医師の診断を受けて、徴兵延期の診断書を書いてもらうようにアドバイスをしたのですが、はじめな彼は、示された命令どおりに出征すると言って聞きませんでした。私はハルビンまで一緒に行き、一泊して別れを惜しみ、翌朝ハルビン駅で見送りましたが、それが彼との最後となりました。後年、彼の実家に便りを出したところ、シベリアで亡くなったとの返事がありました。あのとき強引にでも病院に連れて行っていれば、また事態が変わっていたかもしれないと思うと、今でも

悔やまれてなりません。

私はというと、在郷軍人会などから呼ばれて、軍人勅諭を暗唱させられました。中学の低学年のころには覚えていましたが、その後はすっかりご無沙汰して、全く忘れてしまっていたので、少々嫌味を言われていました。あんなものは、ひと晩もあればすぐに暗唱できる自信があったので、嫌味を言われてもそんなに気にはとめていませんでした。それよりも、私のような半病人に召集令状などこないだろうという気持ちの方が先立っていて、相変わらずの生活を送っていました。

しかし予想に反して、昭和二十年七月二十二日に、私にも召集令状がきたのでした。入隊場所は、斉齊チチハル哈爾と黒河コウカの中間地点にある、嫩江ニンカという街の郊外に所在する部隊でした。当時の私の体は、医師ならば聴診器を当てただけでも、軍隊生活には耐えられないことが分かるような状態でしたので、即日帰郷になると思って入隊したのですが、衛生兵による、いとも簡単な検査だけで、そ

の日に陸軍歩兵二等兵にさせられてしまいました。

私たちが知っていた範囲では、精鋭無比の関東軍と自他共に信じていた軍でした。しかし、南方戦線の敗北に次ぐ敗北で戦力が不足して、精鋭とうたわれた関東軍を櫛の歯で梳くように南方戦線に引き抜いてしまった結果、満州に駐屯する部隊には兵隊がいなくなり、その穴埋めに誰かれ構わずに召集令状を出した結果が、私のような半病人までも入隊させて、外見上の体裁を整えたというのが真実のようでした。そのような現実から、部隊長は大尉、中隊長は年老いた召集の少尉で、小隊は無しというような指揮系統であり、軍隊としての組織も誠にいいかげんで、お粗末極まりないものでした。

それでも軍隊は軍隊ですから、翌日からすぐに教育・訓練が始まり、隊内での規律、銃の取り扱い方、敬礼動作など基本的な訓練でしたが、一緒に入隊した若い人たちは、多少なりとも学校教練

などで軍事知識を植え付けられていた時代でしたので、一応形だけはすぐになじみました。しかし、私の隣に寝起きをすることになった人は、開拓団から召集されて来た千葉さんという四十二歳の人で、一度も銃に触ったことも、軍事教練を受けたこともなく、何も分らない人でした。慌てて銃を取り落したり、歩調が合わなかったり、へまをしたりしては、彼よりも年下の上官に手ひどく殴られたりしているのを気の毒に思いながら、ただ見ている以外にはどうしようもありませんでした。

私は、何とかして普通の軍務から逃れようとしていたので、駆け足とか体操とか体を使うときには、息切れがして仕方がないと訴えて、班長に前の病気のことも打ち明け、どうも具合が悪いからと言っては医務室に行き、診察を受けていました。そのうちに、直ちに嫩江の陸軍病院に入院するように命令ができました。しかし、思いとは違って病院もやはり軍隊でした。各病室には室長

のような下士官がいて、ラジオ体操をさせたり、何やかやと文句を言ったりして、窮屈このうえなく、看護婦も姿を見せないもので、男ばかりの殺風景な入院生活となりました。

やつと待望の入院生活に入ったのもわずかな間で、八月九日には日ソ不可侵条約があるから、まさか侵攻してくるとは考えも及ばなかったソ連軍が攻めて来て、満州の地は一遍に状況が悪化していききました。八月十一日ごろだったと記憶していますが、入院患者の大部分が斉斉哈爾の陸軍病院に転送されることになり、病院列車で斉斉哈爾に向かいました。列車が斉斉哈爾駅に着いたときに、二度ほどソ連軍機による爆撃を受けましたが、被害は何もなく、その日の夜半に陸軍病院に無事到着しました。この病院の病室長は、嫩江病院よりもひどく、嫌な所に来たものだがっかりしましたが、それも束の間で、二日後にはまた、移動することとなりました。今度は南満の通化に行くことになり、再び病院列車に乗車させられました

た。

なぜ通化に移ることになったのかというと、聞くところによれば、関東軍の主力は通化に集結して、そこで徹底的抗戦をするとのことでした。だが、ハルビン駅頭で、在留邦人を置いて、いち早く逃げ出している将校の一団とその家族の様子を見ていた私は、徹底抗戦などとはまゆ唾物にしか思えませんでした。

遅々として進まない列車にいら立ちさえ覚えながら、蚕棚のようなベッドで横になっているうちに、やっとハルビンの駅に着いたのですが、ここでもすぐに降りることはできず、しばらく乗車したまま列車は停車していました。ここで食事の支給があり、受領のため、下士官を長とする一団が下車して、駅事務所まで取りに行きましたが、そこで目にしたのは大勢の高級将校とその家族のグループでした。彼らは一般邦人と、兵隊たちを残して、自分たちの乗っている列車の運行を優先させてここにやって来たのです。この列車の割り

込みのために、我々の病院列車が途中で停車させられ、遅々として進まないことが分かりました。

そして、この手前勝手な将校グループの一人が、家族の目の前で食事を受領に行った下士官に對して、何が気にさわったのか、態度が悪いと言って何度も殴りつけたのです。彼らの家族も家族で、それを当然と見過ごしていたことを、六十年近く経った今でも、腹の立つ思い出として残っています。

そんなころ、ハルビン駅にいた邦人から、「日本が無条件降伏した」とのことを聞き、私たちも日本の敗戦を知ったのでした。私はそれを聞いてすぐに、「これで家に帰れる！」と思い、ほっとしたのが本心でした。

そうになると、急に蘭西のことが頭に浮かび、両親や妹たちがどのようになっているだろうと、心配になりましたが、蘭西についての情報は全然耳にしませんでした。今ではどうにもならないという、あきらめが先に立ち、現実の場に戻ってしま

いました。

ハルビン駅のホームでは、白衣を着た将校か下士官かが、日本刀の抜き身を振り回して、「日本が負けたなどは、デマだ！ デマに決まっています！」などと叫んでいました。

そのうちに列車も動き出しましたが、途中の駅で出会った列車で、乗っていた兵隊が軍隊手帳を破り、風に飛ばしていたのが印象的でした。沿道で中国人が、晴天白日旗を手に手にして振っているのを見て、敗戦をまだ信じていない連中も、やっと納得したようでした。

そうこうしているうちに、列車はやっと通化駅に到着しましたが、戦争が終わってしまつたので、私たちには用がなくなつたのでしょうか、列車はこのまま朝鮮に行くという噂が流れてきました。朝鮮に連れて行かれたら家に戻れなくなるかと、周りの人たちと話し合っていると上官から「原隊に帰りたい者は、ここで降りて帰ってもよい」という指示がでて、これ幸いとばかりに、嫩

江の病院で一緒だった数人と共に原隊復帰の証明書をもらい、ハルビンを目指して北上する列車に乗り込みました。

だが、その列車は敗戦によって中国人の手で行われていて、機関士も中国人になっていましたので、運転技術が未熟なのか、それとも燃料の石炭の質が悪いのか、勾配がちょっと急な所に差し掛かると動かなくなり、みんなが降りて列車を押しすという場面がしばしばありました。こんなことに業を煮やした満鉄の機関士だった人が、機関車に走って行き、運転を交代したらすぐに動き出して、それからは順調に走っていましたが、運転技術の面だけではなく、運行スケジュールが乱れていたせいも、途中駅で何度も停まりながらやつたことで、四平街駅に到着しました。

新京に行く列車は翌日に発車ということなので、病院で私の面倒をよく見てくれたいた先輩の岡本さんと二人で市街に出たら、軍人会館があったのでそこに立ち寄つたところ、将校が二、三人

いて「お前たちは脱走兵か？」と言われたので、「原隊復帰する途中です」と答えたところ、「もう、原隊などはあるわけがないよ!」と言って、煙草数箱と、握り飯を分けてくれました。その晩は、それを食べて四平街の駅で一夜を過ごし、早朝出発した列車に乗れて、翌日には新京に着きました。

やっとの思いで新京駅に着いたものの、ここから先は当分列車の運行の見込みがないとのこと、で、ハルビン行き列車が出るまで、市内の旅館に宿を取り、一週間ぐらいごろごろとして過ごしていました。そんな日々を無為に送っているうちに、ハルビン行きが出るとの知らせを受けて、張り切って新京駅に行き、何とか列車に乗り込んだのですが、途中でもいろいろな苦勞があつて、数日掛かつてやっとの思いでハルビンに到着しました。喜々として改札口に向かったのですが、その時点から敗者の悲劇が始まろうとは思ひもよらないことでした。

### 三 悲劇の収容所生活

改札口には自動小銃を構えたソ連兵が数人と、各改札口ごとに中国人と朝鮮人の二人一組の監視員がいて、日本人だけを選び出して駅前に集めていました。中国人・朝鮮人が二人一組になっていたのは、ソ連兵には区別がつかないので、彼らを使っていたのでしよう。

我々も、一体何のために集めているのか分からず、「治安が悪いので護衛して、それぞれの家まで送ってくれるのではないか」と、誰かが言うのと、「それならば、同じ方向の者同士がまとまった方が良いのでは？」などと、うがったことを言う人もいて、疑心暗鬼の一団となりました。しばらく待たされた挙げ句に、一同整列させられて、ソ連兵の監視のもとに南の方に向かって歩かされ、香坊という所で、以前は何に使っていたのかよく分からないが、有刺鉄線で囲まれた建物に入りました。そこには既に、連れて来られた大勢の日本人男性がいて、これは男狩りであること

を知らされました。

そのわけは、真偽はよく分からないが、日本人が暴動を起こす恐れがあるからだのもっぱらの話でした。その収容所で、一緒にハルビンまで来た人たちとも別れ別れにされてしまいました。

蘭西から逃れて来たと言う人と一緒になりましたが、その人の話によると、蘭西では満州軍の江上軍（海軍）が反乱を起こして蘭西に侵入して、残留していた日本人はほとんど殺されてしまったとのことで、「残念だが、君の家族も殺されただろう」と言った。それを聞き暗澹たる気持ちになり、知らず知らずのうちに涙が流れてきました。

収容所では、乱暴狼藉を働くソ連兵（囚人兵と言われていた）が、「腕時計を出せ！」「万年筆を出せ！」「何を出せ！」と言って、自動小銃を突きつけて身体検査をして、金目の物はすべて強奪しました。数日後には、近くにあった「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所」跡に移されましたが、それから何日も経たないうちに、再び移動ということ

になりました。

牡丹江方面に行くとのことで、駅に向かっていったときに、前方から蘭西で見たことのあるような女性の一人が、こちらに向かって来るのに出会いましたが、その中に、憔悴しきった様子の母と妹がいるのを見付けました。しかし、すれ違っただけでほとんど言葉を交わすこともできませんでした。だが、父も健在で、列車の方に行ったことを、目配せで知らせてくれました。家族の生存が確認できて、これからの前途は多難であるかもしれないが、一応安堵の胸をなで下ろすことができました。

移動は無蓋貨車でしたが、相変わらずのろのろの動きで、しかも、しょっちゅう止まりながらでした。長く停車したときに、下車して父の所在を捜していると、私を捜している父と偶然にぶつかり、やっと再会することができました。父と合流して、いろいろと苦労したことを話し合いました。

父は当時、「在家裡ザインヤリ」という、一種の秘密結社

の会員だったので。この秘密結社は、中国人でもよほど身許がしっかりしていて、信用のある人でなければ入れず、ましてや、日本人で会員になつてゐる人はまれであるというほど、結束の固い組織だつたそうです。終戦の数日前、見知らぬ中国人が父を訪ねて来て、いろいろな話をしたあとで、「あなたは殺されないだろう？」と言つて去つたそうです。そして終戦になり、反乱軍が押し寄せて来たときに、父と一緒にその場にいた県公署の副県長は射殺され、父は撃たれることもなく難を逃れたそうです。これも在家裡の会員だつたからです。そして家族は、刑務所が一番安全だからとのことで、そこに収容されて保護されたのです。

蘭西県の北部一帯に入植していた開拓団の人々が、暴徒に襲われて追い詰められた末に、呼蘭河でお互いに手足を縛り合つて、四百数十人の人たちが入水自殺を図りましたが、その現場に居合わ

せた原住民がびっくりして助け出した人と、自らは死に切れずに苦しきからはい上がつて来た人とを合わせて約百数十人が、この場では助かりました。しかし、約三百数十人の老若男女が水死するという、悲惨極まりない出来事となりましたが、その助かつた人たちも、刑務所に収容されたとのことでした。

父はさらに悲惨な話をしました。現地の興農合作社（日本でいう農協）の人々も、暴漢に襲われて逃避し、昼は高梁畑ゴリヤンなどに身を潜め、夜になつて逃げ回つていましたが、挙げ句の果てには捕まり、女性は下穿きまではぎ取られてしまい、子供を抱いて前を隠すというような格好で、刑務所に収容された人も多かつたそうです。

我が家では、避難するときに、在家裡の仲間の家に預けておいた衣類などを持って来てもらい、みんなに着られる物を分けてあげたそうです。父だけは自由に蘭西の市街を歩くことができたので、収容されている人たちからの頼まれたことな

どを引き受けていたとのことでした。

ハルビンと牡丹江の中間にある、横道河子という駅で列車から降ろされ、そこから牡丹江までは歩かされました。昼は晴れていることが多かったので助かったのですが、夜になると必ず雨が降り、その中での野宿でした。寒いので、父と抱き合って寝ましたが、雨降りの野宿でも、日中の疲れがでて、数時間は眠ることができました。

一行の中には義勇軍訓練所の生徒もいました。彼らは避難する際に、新品の冬服二着、飯盒、水筒などの完全装備を支給されていたのですが、雨に濡れて重くなり、服などを脱ぎ捨てる者もいたもので、それを拾って寒さをしのぎました。歩いているとどが渴き、水を求めて水たまりを探すと、大抵そこには兵隊が白蠟はくろうのような顔になって死んでいて、悪臭を発していました。彼らにも家族がいるのでしょうか、家族はその死をどのように知らされたのでしょうか？ 思っただけでも戦争の無惨さをしみじみと味わったものです。

蘭西県立蘭西病院の菅原院長が、発疹チフスになり、高熱をだしていたのですが、若さと強靱な体で、気丈にも自分でカンフル注射を打ちながら、病人の看護をしていました。何とか持ちこたえ、最初の収容地に着くことができましたが、そこは、原野にトタン板を立て掛けて、四、五人が横になれる場所とか、穴を掘ってその上にトタン板をかぶせたような、ただ雨露だけはしのぐことができる、名ばかりの収容地でした。北満の九月はもう霜が下り、寒さも厳しくて、朝、目を覚ますと、足が硬直していつらかったことを今でも覚えています。

菅原先生の病状はだんだんと悪化し、私たちとは別の穴で寝ておられました。みんなは病気が移ることを恐れて寄り付かず、私が食事や水を運んでいました。その看病が良かったのか、先生の容態も徐々に快方に向かいました。それ以後、私は薄情な人たちとは別れて、収容所生活から解放されるまで、菅原先生と共に行動することになっ

たのです。

私たちが収容されていた所は、牡丹江の西側の梅林という地でしたが、その周辺を三回ぐらい移動させられたのですが、そのころの記憶はどうしたことが、あまり鮮明でなく、しかも、特に苦労したことが断片的にしか思い出せません。

ある収容地では、三人一組で場所を与えられましたが、菅原先生と私は全然知らない人と組みました。そこでは、雨に打たれて蒸れた高粱が配給され、自分たちで炊いて食べることになったのですが、組のその人は、飯盒や、炊事道具をいろいろと持っていて、自分だけで炊いていました。何の道具も持たず、炊飯のできない私たちを侮蔑していましたので、菅原先生と私は、トタン板を拾って来て石でたたいて、底が三十センチメートル角、高さが二十センチメートルぐらいの箱を作り、それに針金で取っ手を付け鍋らしき物を作りました。燃料は、みんなと引込線の跡地に行き、枕木や電柱を、枕木を止めていた犬釘で根気よく

たたき、細くしたて薪にしました。これで炊飯して飢えをしのぎ、さらには水たまりから泥水を汲んで来て、その鍋で煮沸して飲み水をつくり、湯きをいやしたものです。この鍋は、それから万能鍋として重宝し持ち歩いていました。栄養失調で、死者も次々と出たこの収容所での過酷な生活において、病身で虚弱な私が何とか生き延びられたのも、この鍋のおかげと感謝したものです。

「窮すれば通ず」という諺を、このときほどしみに感じましたことはありません。

この収容地では、武装解除された現役兵も収容されていましたが、その兵隊と話したときに、「私たちは近く日本に帰ることになりそうです。ウラジオストクから乗船し、新潟港に着く予定です、新潟では国防婦人会の人たちが、白米のお握りを作って歓迎してくれるとのことですよ。悪いけどひと足早く帰ります」と話していました。どこから出たデマか知らないが、嬉しそうに話していたのが印象に残っています。彼らは日本に帰れる

と信じつつ、シベリアに連れて行かれたのですが、その後、無事に帰国できたらうかと案じたものです。

私たちはその後、社宅か官舎のような、あまり上等でない住宅で、しかも、戸も障子も畳も持ち去られた空き家に移されました。布団も無いので、藁を持って来て押し入れに敷き、菅原先生と、頭と足を互い違いにして寝起きして過ごしたのですが、今思えば、収容所生活の中では、ここが一番上等だったような気がします。

いずれにしても、九月も終わりになり、寒さが一段と厳しく身にしみるころ、やっと屋根のある場所に入り、ほっとしたのに、再び無蓋貨車で、しかも護衛付きでハルビンまで送られることになりました。護衛のソ連兵は、護衛どころではなく、凶暴で貪欲で、貨車の中でも無一物の我々から、なおも何かを奪い取ろうとして、物色して回る始末でした。やっとハルビンの街に帰ることができたのは、何にもました喜びでした。生死を共

にしてきた菅原先生は、牡丹江に残るということで、ハルビンに着いた私は独りぼっちでした。前の収容所で、蘭西の人から聞いた話で、先に避難してハルビンに来た人は、興亜塾という旅館にいるとのこと、ひとまずそこを訪ねたら、やはり十数家族がいて温かく迎えてくれました。考えてみると、この旅館は、私が最初にハルビンに着いたとき、父が泊まっていた旅館でした。私は、差し当たりここで厄介になることにしました。

着たきり雀の私は、着ている物は汚れ、栄養失調で顔も腫れ、そのうえに虱までお供に連れてきたので、まず風呂に入れられ、着替えも用意してもらうなど、親切なもてなしを受け、久しぶりに米飯を食べて、畳の上で、それも布団の中で寝ることができました。

ソ連兵がハルビンに入って来た当時は、凶暴で、日本人の家と見るや家捜しに来て、暴行はするわ、強奪はするわで、この旅館に避難していた人たちも、ソ連兵が来ると男狩りから逃れるため

に、男性は天井裏に隠れ、女性は年上の人を外側に  
にして、部屋の隅に固まって、身を守るために怖  
い思いをしていたとのことでした。

父は、私より数日遅れてハルビンに帰って来ま  
した。収容中に山形県と同郷の人で、しかも遠縁  
に当たる、満鉄の富樫さんという人と意気投合し  
て、香坊に収容されていた母と妹を引き取り、富  
樫さんの社宅に世話になっていったそうです。

しかし、幼い妹は、環境の激変と粗末な食べ物  
のために栄養失調になり、だんだんと衰弱して、  
父母の懸命な看護にもかかわらず、十月下旬のあ  
る日に、わずか二歳六カ月の短い人生を終えてし  
まったのです。富樫さんの知り合いの大工さんに  
頼んで、小さな棺桶を作ってもらい、簡単な野辺  
送りを済ませました。その後、父母は富樫さんの  
紹介で、林さんという独身者が一人で住んでいる  
家の二階を貸してもらい、そこで生活を始めまし  
た。私はまだ興亜塾にいたのですが、ここを明け  
渡すことになり、父母の所に移り、三人で暮らす

ことになりました。我々難民にとつては、雨露を  
防ぎ、横になって寝ることができれば幸いなこと  
です。

丸裸で避難してきたので、鍋、釜、食器、そし  
て布団など、生活最低必需品を何とかしなければ  
ならなかったのですが、母はとても機転の利く、  
生活力のある人でしたので、蘭西で収容される際  
に、とつさに持ち出した小さな手提げ袋の中に、  
わずかでしたが、金と銀の製品を入れていまし  
た。これが大いに役立ち、これを少しずつ売って  
は生活用品をそろえました。

もちろん、遊んで暮らす余裕などはなく、母は  
何とかしなければと思いついたのは、品物をお金  
に換え、そこで利鞆りづを稼ぐ仕事でした。結構良い  
商売でしたが、寒空で立ち通ししているのは、きつ  
かったことと思います。私たちも、肉や石けんな  
ど、いろいろな行商をして努力しましたが、母に  
はかないませんでした。

ある日の朝、町内の世話役がソ連兵を連れて来

て、「このソ連兵が、須藤さんにちよつと用事があると言っているので、一緒に行ってくださいませんか？」と、父を呼び出しに来たのです。父は、そのソ連兵とどこかに連れて行かれました。その後、父と同じ職業に就いていた人たちも連行されたことを知り、合点しました。

次に訪れた災難は、母と私が相次いで発疹チフスにかかり、高熱にうなされ苦しかったのですが、心臓さえ持てば二週間で治ることを、菅原先生のこと知っていましたので、頑張ろうと、母と二人で枕を並べて寝ていました。親切な人が医者を選んでくれて、その医者が、発疹チフスの患者のみを収容している難民病院に入院させてくれました。

そこは病院といっても、以前幼稚園の室内遊戯場だった所でかなり広い部屋で、床に古畳を敷き、布団を持ってきている人はそれを持ち込み、無い人は借りて寝ていました。借りた布団は、とても布団とは言えない代物でした。石炭ストーブで暖

はとつてありましたが、ハルビンの冬の寒さをしのぐには不十分でした。医師や、看護婦はいたのですが、一日に一度回診するだけで、病人の世話、開拓団にいたという女性二人と、男性一人の三人でしていました。

その女性の一人が、ときどき懐の中から小さな板に何か書いた物を取り出しているのを見て、私が「それは何ですか？」と聞いたところ、「避難行の途中、日中は高粱畑の中などで隠れていて、夜になって逃げていたのですが、隠れているときに赤ん坊が泣くと見付かるから、泣かせるなど周りにから言われ、仕方がなく腰紐で首を絞めてしまったが、これはその子の位牌です。今でも思いつきながら話してくれました。私たちも思わずもらい泣きをしてしまいました。避難して来るときには、こんなことがあちこちで起きていたそうです。

やがて、おかげで熱も下がり、無事に退院する

ことができたのです。そうこうしているうちに、寒い冬も終わり、春が近づきました。早速、母は我が家のすぐそばで開業している中国人の電気屋に、炊事婦として住み込みました。私は、富樫さんの長男で、二歳ぐらい年下でしたが、体格が良いので日雇いで一家の生計を支えていた人と、日雇いで働いていました。彼は、私が体の弱いことを知っていたので、「兄ちゃん！ 僕がカバーしてやるから一緒に行くよ」と、誘ってくれたのです。

昭和二十一年の春ごろに、日本人を帰国させるために、中共軍と国府軍が一時停戦協定を結び、ハルビンでは八日ごろから引揚げが始まったように記憶しています。私たちの居住地では、九月の中旬から開始されました。

出発時には中共軍の兵士が護衛に付き、陶頼昭という場所で国府軍に引き継がれたのですが、国府軍に代わったとたんに、賄賂の要求でした。賄賂を出さないと列車に乗せないのです。これが、

新京、奉天（瀋陽）、錦州と続いたのには閉口しました。

そんな難行苦行の末、やっと葫蘆島コロトウに着き、DTを全身に掛けられて引揚船に乗船したので。引揚船は、日本の小さな軍艦でしたが、種類は忘れてしまいました。

博多港に着いて、再度DTの洗礼を受け、検査のために十日ぐらい博多港沖に停泊した後、十月中旬に約一カ月かかった引揚げが終わり、やっと博多の土を踏みしめたのでした。

#### 四 引揚げ後のことなど

ハルビンを出発して一カ月、博多に上陸して、いろいろな手続きを済ませて、帰郷する方面ごとに分けられて列車に乗りました。心は早くも故郷そして親類・縁者のもとに飛んで行きました。

母と私は、母の故郷である長野県の農村に向かいました。その当時、母の実家は、家長である母の弟が仕事の関係で九州に転勤していて、家は空家になっていましたので、そこに落ち着くことが

できました。私にとつては、初めての信州での生活となったのです。

生活を始めてすぐに食糧の配給がありました。二十日分の食糧のうち、二日分が麦で、十八日分がさつま芋で、こんなことでは先行きどうなるのかと思案したものでした。

そのころ肉親を捜す場合は、引揚証明書を見せれば、汽車に無料で乗れるということでしたので、兄を捜すために、まず山形県の鶴岡市に行きました。ここでハルビンで亡くなった知人の遺髪・遺爪を届け、ひと晩、友人の家に泊めてもらいました。翌日、兄の親友のいる新庄市に行き消息を尋ねたところ、浦和市にすることが分かり、すぐに浦和に行き、ここで久しぶりに兄と再会を果たしました。

兄は、昭和二十年の暮れに北京から引き揚げて、時事新報の記者をしており新婚のほやほやでした。ここで数日厄介になり、就職の依頼などをして長野に戻りました。

母は、親戚からミシンを借り、近所の人からの依頼を受けて洋服の縫製をしたり、洋裁や、お花を教えたりして生計を立てていました。相変わらず食糧事情は悪く、毎日雑炊や水団の連続でした。

そんなときに、ソ連に連行されていた父から手紙がきて、父が無事なことを知り、母と手を取り合せて喜びました。すぐに返事を書き、こちらの家族の状況を知らせましたが、その父も昭和二十二年の秋、無事に帰国しました。

その父と入れ代わるように、私は肩がひどく痛むようになり病状も異常でしたので、国立長野療養所に入ることとなりました。私の肩は、結核性右肩胛関節炎でしたが、その当時は特効薬も無く、ただ動かさないようにしている以外には療法が無かったです。そのころに、結核にはストレプトマイシンがあったのですが、一般人では手が出ない高価なものでしたので、使用するなど思ってもよらないことでした。しかし、療養所にいれ

ば何もしなくてもよいので、痛みもだんだんと薄らぎ、徐々に落ち着き、一年半の療養所生活で退所することとなりました。そのうちにストレプトマイシンが保険適用になり、これを使えば手術ができるというので、再び長野療養所に入所して、数カ月後に、右肩胛関節切除手術並びに固定手術という手術を受けました。肩が固定するまで半年ほどかかり、右肩は肩胛骨に固定したため、肩胛骨の動く範囲だけしか動かないものの、痛みがなくなつたことはこの上もない喜びでした。

この間、よき僚友に恵まれ、すべての面で、言葉では言い表せないほど世話になりました。これらの友人がいなければ、手術も受けられなかったかもしれないと思ひ、いまだに感謝の気持ちでいっぱいです。

体が何とか良くなると、次には働くことですが、前に療養所にいたときの友人が、東京で会社を起し、順調に運営されていることを聞き、彼の会社で働こうと勝手に決め込み、東京の兄の家

に置いてもらひ、友人を口説いてそこに就職しました。二十一歳で引き揚げ、二十七歳で初めて世の中に出ることができたのです。

その後、一年ぐらいして友人の協力を得ながら、他の同僚と別の会社を設立して、六十歳になるまで、その仕事を続けて生活の糧を得ました。そのあとは、最初に会社と一緒に始めた同僚にすべてを譲り、それからの十六年間は、自分でやりたかつたことに没頭して現在に至っています。

最後になりましたが、平和の大切さを重んじて、戦争だけは二度とやつてはならないということ、そして、軍隊は国民を守るためのものではないことを銘記していただきたい。このことを強調して、私の貴重な引揚げ体験記を終えます。